



名古屋市立高校生のシドニーへの派遣

(一財)自治体国際化協会シドニー事務所次長 吉見 昌久 (愛知県名古屋市派遣)

2015年7月28日から同年8月6日まで、名古屋市立高等学校の生徒男女それぞれ8名計16名が、シドニー及びその近郊に派遣され、滞在しました。本稿では、クリアシドニーとして、シドニー・名古屋姉妹都市委員会との連絡・調整、シドニー市役所表敬訪問などを活動支援したことから、派遣事業の概要と、実際に参加した生徒及び同行された先生から今回の派遣の感想を寄せていただいたのでご紹介します。

名古屋市とシドニー市との関係は、タロンガ動物園から東山動物園へコアアラが送られてから昨年30周年を迎えたほか、今年で姉妹都市提携35周年を迎えます。名古屋市からの高校生派遣は、平成7年からの事業ですが、同市が引き続きこうした地道な派遣・交流を積み上げ、「未来を担う」若者の育成を行っていくことは、両市の関係を一層深め発展させることに大きな意義を有するものと思われま

派遣生徒・先生からの感想

オーストラリアで感じたこと

- 7月28日～31日
 チェスターヒルハイスクール体験入学
- 7月31日～8月2日
 姉妹都市委員会委員のお宅にホームステイ
- 8月3日 セントアロイスヤスカレッジ訪問
- 8月4日 シドニー市役所表敬訪問
- 8月4日～5日 班別市内視察
- 8月6日 タロンガ動物園訪問

派遣生徒のシドニーでの滞在スケジュール

生徒の皆さんからは、現地高校への授業参加を通じて、異文化交流の喜びやオーストラリアの多文化共生を実感したことや、あらためて日本のことや英語を学ぶ刺激となったことが紹介されています。「高校教育の活性化を図るとともに、未来を担うにふさわしい国際的視野を持った心豊かな人間の育成と国際理解教育の充実に資する」とする名古屋市の本事業の目的に十分適う成果として評価できます。

一方で、今回の派遣にあたり、デービッド・ブッチャー委員長はじめ、シドニー・名古屋姉妹都市委員会の委員の方々にはホームステイをお引き受けいただきました。事前の車の手配から、食事・動物アレルギーなどにまでご配慮いただき、生徒の皆さんにとっても、現地での家庭生活と自然を体験でき、また、姉妹都市の絆を実感できる良い機会となりました。

名古屋市立向陽高等学校 1年 亀山 日向
体験入学先のチェスターヒルハイスクールでは、派遣団の生徒のみで英語の授業を受けたり、バディーと通常授業に参加したりしました。生徒一人一人に付き添い、学校を案内してくれたバディーはみんな日本語を勉強していて、日本についてたくさん質問をしてくれました。私も質問に答えるために、一生懸命英語で会話しました。日本に興味をもつ人が多いと知って、嬉しかったです。

シドニー市内の視察では、本屋に行ったことが印象に残っています。十数個にもなるコーナーがあり、コーナーごとに異なる言語の本が置いてありました。もちろん、日本の本や漫画も多くありました。オーストラリアの多文化共生を体感し、他国の言語の商品があまりない日本を小さく感じた出来事でした。

初めての海



外で経験したことは、何もかも新鮮で興味深いものでした。自分の意見をうまく伝えるために努力する大切さと、英語を通じて、異文化の人たちとわかり合える喜びを感じることができました。たった12日間の研修でしたが、二度と経験できない有意義な出来事ばかりでした。

現地の人との会話を通して、英会話の難しさを痛感しました。また、英語が自分と世界との距離を縮め、世界観を広げてくれるのだと、あらためて思いました。私はこれから先、今まで以上に英語の勉強に力を注ぎ、自分の英語力を向上させていきたいです。そして、この経験を忘れないようにして、少しでも多くの人が海外で学ぶことに興味を持ってもらえるようにしていきたいです。

My best memories

名古屋市立富田高等学校 2年 榊原 悠太
一番印象深かった体験はチェスターヒルハイスクールでの4日間の体験入学です。スクールバディーやその友人達が学校のこと、授業のこと、趣味のことなどをたくさん話してくれました。校庭を移動していると「初めまして」「こんにちは」「僕の名前は〇〇です」と日本語で話しかけてくれる人もいてうれしくなりました。初めて体験することも多く、わからないことも沢山ありましたが、わからないことを尋ねるとそのたび丁寧に答えてくれたのでとても助かりました。

授業の雰囲気は日本のものとは違い、生徒が活発に意見を発言していてとてもぎやかでした。先生が説明している途中で質問をしたり、ほかの人の意見の補足をしたり反対意見を言ったりと自分の意見を発信することが多い授業でした。はじめは驚き、意見を言うことができませんでしたが、意見を言えるようになると授業を受けることが楽しくなりました。

僕は、消極的な性格で会話をあまり重視してきませんでしたが、今回の研修で会話がいかに大切か気づきました。わからないことを訊く、自分から話しかける、質問に答える、全てを英語で行うのは大変でした



が、話しかけると答えてくれるので会話が段々楽しくなりました。

会話の途中で言いたい単語が出てこなかったり、とっさに英語で答えられなかったりしたことが何度もあったので、もっともっと英語の勉強をして会話が円滑に進むようにしていきます。そして、何事にもチャレンジしていく人間になりたいです。

Unforgettable Experiences

名古屋市立名東高等学校 3年 谷川 雛子
最初の4日間はチェスターヒルハイスクールに通いました。午前は研修生16人で英語の授業を受け、午後は各自のバディーのクラスに参加しました。授業は日本とは大きく異なりました。机が教壇にむかって並び、静かに先生の話聞くわけではなく、6人ぐらいつつの机が向かい合わせになっていて、生徒は、先生が話しているでも自分の考えを積極的に発言していました。日本語を勉強している生徒が多く、とても上手で驚きました。

今年は、ホームステイは2日間になり、さらに数人で一緒にホストファミリーにお世話になりました。ホストファミリーは牛や馬、鶏などを趣味で飼っていて、乳搾りやえさやり、ブラッシングを手伝いました。日本では体験できない大自然に包まれた生活は魅力的でした。現地の家庭生活を体験できるとても貴重な時間だったので、食事の際、移動中の車中などで積極的に話しかけました。

日本にいる時は、自分の英語に自信が持てず、恥ずかしさから外国人に話しかけるのをためらうことが多かったです。しかし、今回の研修でたくさんの人と英語でコミュニケーションをとり、自分から話しかける勇気が持てるようになりました。

英語での会話は、聞き取れる部分もあったのですが、やはりネイティブは話すスピードが速く、何を言ったかわからないことが多々ありました。また、自分の語彙力





のなさに気づいたのでこれから勉強したいと思います。今回の研修を通して、海外で働きたいという気持ちが一層強まったので、海外で活躍できるように、英語はもちろん日本についても勉強し、また第三言語習得に向けても努力したいと思います。

国際交流—手渡すバトン

名古屋市立桜台高等学校 3年 鈴木 秀和
シドニーでの研修は、毎日がとても貴重な体験ばかりでした。オーストラリアから見た日本について知ることができたのもその一つです。日本のマンガやアニメが、現地の若者の間で予想以上に流行っており、それらに関する質問に十分には答えられなかったことが心残りです。

班別研修では、「環境・自然」をテーマにブルーマウンテンズ国立公園に行きました。シドニーから電車で約2時間の郊外にあるその国立公園には、驚くほどの絶景が広がっていました。

ハイキングコースには、「ごみは持ち帰るか、ごみ箱に捨てる。」「コース外には絶対に入らない。」また、「植物には触れないように。」などの看板があり、環境を守るために様々な工夫がなされていました。もう一つの発見は、山岳地帯の観光地であるにも関わらず、「どんな人でも楽しめる」という点です。車いすを利用して見学できるよう、スロープが至る所にありました。ニーズにあわせてコースも自由自在に選べます。環境保全とユニバーサルデザインを実感しました。

体験入学を通して、オーストラリアではなぜ異なるバックグラウンドを持つ人々が仲良く生活できているかを知ることができました。それは、みんなが英語を話せるという点にあります。共通の言語を使い、コミュニケーションをとること、そしてさらに、異なる文化を受



け入れ、共有していくことです。この発見をもとに、自分なりに国際平和の実現への糸口を考えるきっかけとなりました。

言語教育の原点を垣間見て

名古屋市立名東高等学校 教諭 瀬古 径代
名古屋市立高校生海外派遣事業に随行し、オーストラリア（シドニー）の現地高校で英語の授業を参観する機会に恵まれました。特に、今回のスクールビジットプログラムを提供してくれたチェスターヒルハイスクールには、併設の IEC（Intensive English Centre）があり、その授業を見ることができたのは英語教員にとっては大きな成果でした。

IEC におけるカリキュラムの特徴は「英語」という言語の習得のみに焦点を当てるのではなく、生徒たちの実生活・実益に結びつける形で「英語」を習得させることに主軸が置かれていることです。例えば、名古屋市の高校生グループが初日に受けた授業では、滞在ホテルから学校までの実際の通学方法（バスの乗り・降りの方法）が題材になっており、生徒たちも集中して聴いていました。IEC では、移民などオーストラリアでの生活を始めた子どもたちが「英語の授業」だけではなく、「英語」で他教科の基礎的な「授業」を受けます。早晚、正規の高校の授業に編入していくための学力をつけることを目標としているからです。

生徒たちにとって「英語」はオーストラリアという社会で自分に必要な情報・知識を得たり、意思表示をしたりするためのツールとしての位置づけが明確であり、それを使うことが自然に身についていく環境が用意されていると感じました。



【体育】IEC の生徒と一緒に準備体操
使用言語はもちろん「英語」です。